

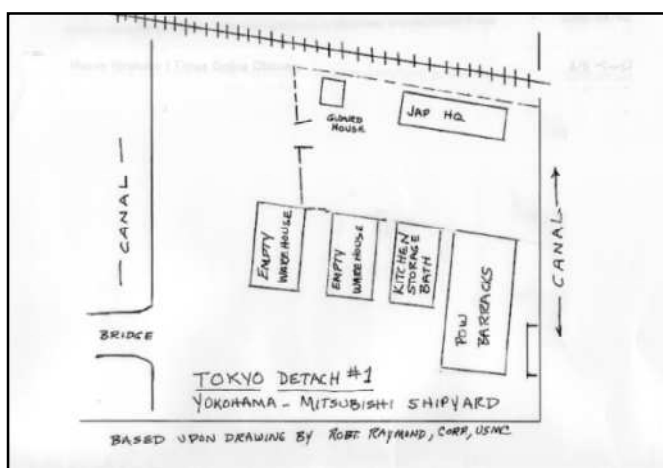
東京第1派遣所（三菱横浜ドック）

笹本妙子

この収容所は、現在の横浜中央卸売市場青果部の辺りに開設され、捕虜たちは三菱重工横浜船渠 [註1]（現在のみなとみらい地区）で使役された。捕虜側の証言によれば「東京地区では最悪の収容所」と言われ、戦犯裁判では初代所長が絞首刑、2代目所長と軍属が終身刑、その他の職員もかなりの重罪に処せられている。

■ 所在地・歴史

1942年11月18日、東京第2分所（横浜球場）の支所として、横浜市橋本町1-1に開設され、同月28日、捕虜493名（米291、英171、豪19、蘭12） [註2] が収容された。現在、横浜中央卸売市場の青果部がある辺りだが、当時は倉庫街で周囲は運河に囲まれていた。捕虜は三菱重工横浜船渠（以下三菱横浜ドック）で使役された。



43年8月1日、東京第1派遣所と

収容所見取り図（Roger Mansell 提供）

45年5月13日に閉鎖され、捕虜420名 [註2] は東京大森の本所と仙台地区の収容所に移送された。米軍のグレイディ(Frank J. Grady)中尉の著書『Surviving the Day』によると、イギリス人の半分は秋田県尾去沢町の仙台第6分所へ、残りのイギリス人と、アメリカ人、オーストラリア人、ニュージーランド人計100名 [註3] は岩手県釜石市の仙台第4分所へ、オランダ人は北日本の収容所へ移送されたという。

[註1] 『三菱重工横浜製作所百年史』によると、昭和10年に横浜船渠株式会社と三菱重工が合併して「三菱重工横浜船渠」となり、昭和18年7月に「三菱重工横浜造船所」と改称した。

[註2] この数字は GHQ/SCAP 法務局調査課報告書490号によるが、グレイディの著書には、彼が43年1月末にこの収容所に来た時点では捕虜500名がおり、内訳は米100、蘭75、豪と加が少数、残りはイギリス人であったと記されている。

[註3] 後述するように、この収容所では54名が死亡しているが、開設時の人数と閉鎖時の人数が合わず、国籍別の人数も合わない。グレイディの記憶違いか、開設期間中に捕虜の入れ替わりがあったのかは不明。

■ 居住環境

倉庫を改造した建物が収容所に使われた。捕虜用宿舎は2棟で、他に事務所棟や病室棟などがあった。宿舎は2段の寝棚になっており、畳が敷かれていた。建物は貧弱で、冬は

凍り付くように寒かったが、ストーブは2個だけで、氷点下でも1日2時間しか使えなかった。

■ 職員

初代所長は西沢正夫中尉（42.11.18～43.6.22）、2代目は千須和武一中尉（43.6.23～45.2.25）、3代目は本田中尉（45.2.25～45.5.13）。

職員全体の人数や詳細は不明だが、他に東部軍から20人ほどの衛兵が3週間交替で警備にあたっていた。

■ 捕虜

捕虜の大半はシンガポールから輸送船「大日丸」で移送され、42年11月25日に門司に到着したが、このうちアメリカ兵は台湾から乗船した。彼らはもともと42年9月にフィリピンから「りま丸」で台湾に送られた捕虜たちである。

前任将校は、英軍のトーマス・リンゼイ（Thomas H. Lindesay）大佐であった。

米軍のグレイディ中尉は、他のアメリカ兵とは別に、43年1月末に部下と2人だけでこの収容所に送り込まれた。彼はフィリピン守備隊の暗号解読部長として、マッカーサー将軍やウェンライト将軍との送受信を担当していたが、42年春に捕虜となり、ビリビッドやカバナチュアンの収容所に収容された。この間、日本軍は彼から暗号解読の情報を引き出すべく何度も尋問を行ったが、尋問官はエール大学卒の若い将校で、彼が口を割らなくても決して手荒なことはしなかった。この“エール将校”は彼が第1派遣所に収容されてからも尋問にやって来たが、彼の口を割ることは無理と判断したのか、尋問は2、3度で終了した。グレイディは、“エール将校”はフィリピンの捕虜たちの惨状に心を痛め、その何人かでも飢えや病や死から救おうと、自分の住む国に差し向けてくれたのではないかと回想し、「彼は私にとって、道理をわきまえた日本の代表であり、戦争への道を望まぬ、そして自らの残虐性に衝撃を受けた日本の代表であった」と書いている。

その後グレイディは釜石の仙台第4分所に送られ、そこで終戦を迎えたが、戦後、横浜の戦犯裁判に検察側証人として出廷し、多数の日本人を有罪（死刑を含む）に導いた。

■ 労働

捕虜は三菱横浜ドックで使役され、橋本町の収容所から徒歩で通った。

太平洋戦争突入とともに造船界は戦時標準船の大量建造時代となり、この造船所でも1943年末には建造量79万総トン、44年には171万総トンに達し、三菱重工全体の約3割を占めるに至った。その労働力として正規の従業員のみならず、一般市民、学生・生徒、女子に至るまで動員され、敵国の捕虜もまた駆り出されたのである。

この造船所は1982年に移転し、跡地は今、超高層ビルの建ち並ぶみなとみらい地区となっているが、帆船日本丸が繋留される1号ドックやランドマークタワービル下のドック

クヤードガーデン（2号ドック）にその名残が留められている。

当時、県立神奈川工業学校の学生としてこの造船所に勤労働員され、捕虜と共に働いたという堀山龍起氏は、同窓会の会誌に以下のような回想記とスケッチを寄せている。

この非常時下で、而も大事な造船所内で連合軍捕虜が使役に従事していた。初めて見た時は、大丈夫かしらと不安に思った。

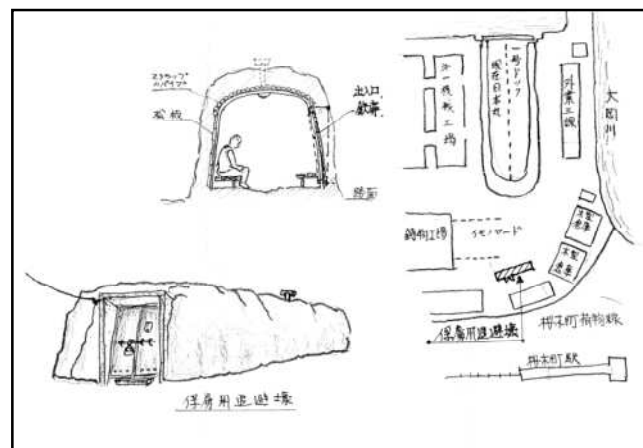
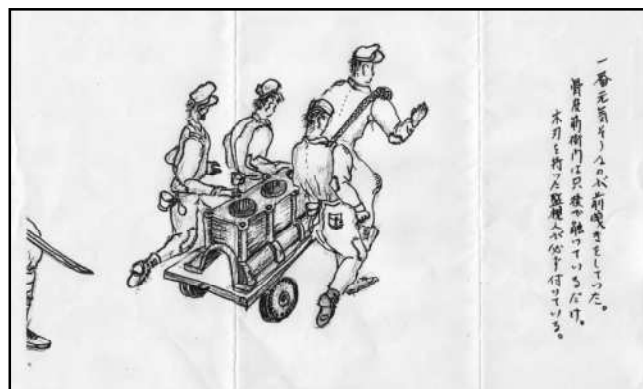
毎日、四列縦隊で横浜駅方面より構内に入る。200名ぐらいの人員だ。薄汚れた感じの服装もちぐはぐな者も居り、共通項は大型スプーンとブリキ製食器を金輪に付け腰へぶら下げている事、目が合うとニヤニヤしているだけ、人相も余り良いとは云えぬようだ。俺は小学校が山手の元街小学校で、而も同級に青い目の子も何人か居り、自宅も近い故に良く遊び又両方の家も仲良く往来したりして、土地柄様々な外人を見慣れていたので、直感的に判る気がした。

使役だから多分、兵及び下士官位の集団だろう。無精髭を伸ばしているが、バイクングの様な凄みの有る奴にはお目に掛からない。大半がガムを噛んでいるようだ。木刀を持った監視人が付き添っていて、5、6人で鋳物ブロックを台車で運んでいる。実にのんびり「マンマンデー」

一度監視人の隙をみて、「アーユアー、インマウス」と何度か発音を変えて聞いてみたら、「タール」と応えたのには驚いた。奴さんたち口の中でタールを精製しているのかと。

二度ほど雑炊の残りを分けてやったら、数日後所内で擦れ違った折に、俺の顔を見て腰の食器を叩いて催促するのは此方が参った。

或る午後機会を見て防空壕内へ捕虜を独り引き込み、学校で習うリーダーを見せ読ませようとしたら、声は出すが、すこぶる変な風に聞こえる。其の夜家で父親に尋ねたら、多分豪州兵だろう、兵卒には文盲も多く、発音も俗に云う豪州ナマリだよと云われ、父親も三井物産に居た時には困ったことも有ったと話してくれた。



以上3点 堀山龍起 画・提供

(中略)

空襲警報が出ると使役の豪州兵達は空を見上げてニンマリ、指定された鉄扉付の壕内へ收容され、鍵が「ガチャン」。これは当然だろうが、火災時はどうなる事やら、余計な心配はせず俺たちはどう回避するのが良いか普段考えておかねばと。

堀山氏はまた、同級生たちから聞いた話も伝えてくれた。特配の食糧運搬を「日の丸報国隊」(少年刑務所の囚人たち)にやらせていたら数の不足や量目の減量が毎日のように発生したが、試しに捕虜を使ってみたところ、そのような問題が一切なくなり、彼らの方がずっとジェントルマンだと思ったという。また、ある捕虜が赤十字支給の新品の靴を履いていたところ、悪評判の工員がおむすび2個とその靴を交換しろとパイプを振り回して強要したので、捕虜はその靴を脱ぎ、くたびれたズック靴に履き替えた途端、おむすびも新品の靴も消えてしまった。彼は大きな体を震わせて抗議したが、工員にビンタを張られ、涙を流し大声で泣きわめいた。それを見たある同級生が、余りにも気の毒に思い、自分のおむすびを作業台の陰に置いてその捕虜に目配せし、その場を去ったという。

捕虜たちは1日10時間働き、休日は月に2回だけだった。外地での過酷な生活や悲惨な航海で疲弊している捕虜が多かったが、マラリア熱でも赤痢でもひどい下痢でも容赦なく仕事に出され、寒空の下で船の修理をしたり、スチールを延ばしたり、鉄板を裁断したりと、重労働を強いられた。ひもじさの余り、船底に付くフジツボや生ゴミを收容所に持ち帰って食べ、それが発覚してこっぴどい懲罰を食らった捕虜たちもいた。

捕虜の中には30名以上の将校がいたが、ジュネーブ条約によって将校は労働を免除されていたため、炊事や病人の世話などをする一部の将校を除いては、一日中ぶらぶらしている者が多く、労働に出される下士官兵との間に一時険悪な対立があったという。

所長の西沢中尉は将校も働かせようと画策し、船や機械設備の図面を描く仕事を命じた。軍事に関わる仕事はできないと拒否され、仕方なく電灯の傘貼りの仕事を命じた。前任将校のリンゼイ中佐が「民間人の仕事なら喜んでしましましょう」と懇懇に答えると、西沢中尉は「これは女の仕事だ。お前たちは女だ!」と怒り狂って将校たちを次々に殴ったが、将校の中に傘作りにプロ級の腕を持つ者がいて、素敵な製品に仕上げたという。

■ 收容所の生活

この收容所では暴力が蔓延し、捕虜たちは些細なことで厳しい懲罰を加えられた。靴が擦り切れているだけで殴られ、枕カバーが汚れているだけで両手にバケツを持って数時間立たされた捕虜もいる。靴も枕カバーも天皇の下賜品だからという理由だった。

初代所長の西沢中尉は、病人点呼



44年のクリスマス (米公文書館所蔵、工藤洋三提供)

(その日仕事に出られるかどうかを判定する)の時に、病人を強く押す「検査」をし、その捕虜がぐらつかなければ仕事に出し、ぐらつけば無礼だと言って殴った。彼は捕虜だけでなく下級の職員や衛兵にも始終暴力を振るっていた。後述するように、所長や職員の虐待が原因で死亡した捕虜もいる。

赤十字小包はほとんど日本人職員が私物化して捕虜には行き渡らず、クリスマスと天皇誕生日に1人半個ずつ支給されただけだったが、それも捕虜が仕事に出ている間に軍属たちがみな持って行ってしまったという。同じ横浜の横浜球場収容所の捕虜たちが、計3回1人1個ずつ支給されたのとは大きな違いである。

44年のクリスマスに撮影された写真があるが、テーブルの上に並べられたご馳走はプロパガンダ用で、撮影が済むと片づけられてしまったという。

残虐で無慈悲な職員が多い中で、捕虜たちを陰で支えてくれた日本人もいる。オキモトという50歳前後の通訳で、彼はニューヨークで36年間暮らし、日米開戦後、日系人の収容所に入れられたが、42年夏に交換船で帰国した。彼は他の職員の間を盗んでは捕虜たちにタバコや食べ物や新聞を持ってきてくれ、収容所の改善にも努めてくれたという。

■ 病気と死

捕虜の医療は英軍のプライス軍医が担当し、ブラックストン中尉が補佐した。

過酷な労働に加え、食糧も乏しかったため、多くの捕虜が病気になったが、薬は満足に支給されず、病人には働く者の3分の1しか食糧を支給されなかった。その結果、54人もの捕虜(米33, 英16, 豪3, 蘭1, ノルウェー1)が死亡した。死因の多くは肺炎、栄養失調、脚気などであった。イギリス人16人とオーストラリア人3人は横浜の英連邦戦死者墓地に埋葬されている。

どの死も哀れだが、とりわけ残虐な事件があった。

初代所長の西沢中尉は、病室がいつも満室で、労働に出せる捕虜が少ないことに業を煮やし、マラリア患者を病室から追い出すように命じ、病人たちを自ら刀で殴り、部下にも殴らせた。そして、マラリア患者の食糧を一般患者の半分、つまり一般捕虜の6分の1に減らした。それからまもないある日、病人点呼でマラリア患者が休みを申し出ると、西沢中尉は仮病だと言って怒り狂い、また刀を振り回して彼らを滅多打ちにした。部下たちも激しい殴打を加えた。彼らは全身にひどい傷を負い、その2, 3日後に2人の捕虜が死亡した。西沢中尉はこの事件の前にも捕虜を1人虐待死させており、捕虜たちは彼を「人殺し」と呼んでいた。

2代目所長の千須和中尉は西沢中尉ほど暴力的ではなかったが、捕虜に同情的ではなかった。満足な医薬品がなかったため、ブラックストン中尉は薬をヤミで購入していたが、これを知った千須和中尉は彼を営倉に10日間も入れ、薬を売った相手を白状させようと彼を殴り続けた。またある時、マラリアの再発でフラフラしているドレスラーという捕虜が仕事に出され、造船所の足場から9呎下の地面に落下して大腿骨を複雑骨折した。動脈

がダメージを受けて危険なので、プライス軍医とブラックストーン中尉は彼を品川病室に入院させるよう頼んだが、千須和中尉は「骨折したぐらいで死にはしない」と拒否した。ドレスラーは失血して刻々と状態が悪化していったため、2日後、千須和中尉はついに彼を品川病室に送ることを決めた。しかし、その時にはドレスラーは動かせるような状態ではなかったので、プライス軍医らは品川から医療器具を持った医師を呼んでほしいと頼んだが、千須和中尉は同意せず、ドレスラーをトラックの荷台に乗せて品川に送った。着いてまもなくドレスラーは死んだ。

グレイディ中尉は、遺体の火葬の仕事を担当していた。毎朝、誰かが死ぬと、松の木の箱に遺体を入れ、荷車に棺を積んで3キロほど離れた火葬場（久保山火葬場か？）まで運んだ。火葬した骨は小さな箱に入れて収容所に持ち帰った。火葬場への行き帰りに見た横浜の街の風景を、グレイディは興味深く観察している。市民はみな貧しい身なりで忙しそうに駆けずり回り、武装した警備兵に引率される捕虜に近づこうとはしなかったこと、兵隊や警官たちは権威をカサに着て、いつも市民を怒鳴り散らしていたことなど。

■ 空襲の激化と収容所の閉鎖

捕虜たちは、通訳のオキモトが伝えてくれるニュースや「日本タイムス」（プロパガンダ用英字紙）などで、戦況をほぼ正確に把握していた。「日本タイムス」は日本に不利な情報は報じなかったが、「何もないのは良い報せ」の諺どおり、連合軍が勝利しつつあることを確信した。44年11月頃から空襲が日常化してくると捕虜たちの意気も上がり、造船所でエンジンの部品を壊すなどのサボタージュをしては快哉を上げた。45年3月10日の東京大空襲の時には、収容所から赤く燃える東京の空が見えた。

一方、収容所の職員たちはたびたびの空襲で敵愾心を募らせ、ますます暴力が激しくなってきた。造船所の作業員も怒りっぽくなり、一般市民も捕虜への憎悪を露わにするようになった。

造船所もいよいよ空襲の危険が迫ってきたため、45年5月13日に収容所が閉鎖され、捕虜たちは東京大森の本所と仙台地区の収容所に移送された。

■ 戦犯

京浜地区でワーストワンと言われたこの収容所から7人の職員が以下の刑を科せられた。
西沢正夫中尉：絞首刑／千須和武一中尉：終身／川村博兵長：重労働30年／神戸初明（軍属）：終身刑／宍戸庄之助（軍属）：重労働30年／山田良民（軍属）：重労働15年／池田裕信（軍属）：重労働25年

西沢中尉は、多数の捕虜を虐待し、3人の捕虜を死に至らしめたこと、十分な食糧や医薬品を支給せず捕虜を酷遇したこと、赤十字救恤品を横領したこと、部下の残忍な暴力行為を許容し、所長としての責務を怠ったことなどが罪に問われた。これに対し、弁護側は「当収容所に到着した時点で、かなりの捕虜が赤痢、マラリア、脚気などで衰弱していた」

「当時の日本では食糧や医薬品の入手が極めて困難であったが、闇ルートでビタミン剤を購入するなど最大限の努力を払った」「士官や下士官まで働かせたのは、所長の責任ではなく東条首相の責任である」などと抗弁したが、罪状項目 29 件中 25 件が有罪とされ、極刑を執行されるに至った。

千須和中尉は、ドレスラーの入院を拒否して死に至らしめたこと、その他は西沢中尉と似たような罪状である。また転勤先の仙台第 1 分所（福島県湯本）での行為も罪に問われた。

当初、千須和中尉と川村兵長も絞首刑の判決を下されたが、確認でそれぞれ終身刑、重労働 30 年となった。

彼らの裁判には米軍のグレイディ中尉が検察側証人として出廷し、その証言が判決に大きな影響を及ぼしたものである。

参考文献

- ・ GHQ/SCAP 法務局調査課報告書 490 号
- ・ GHQ/SCAP 法務局調査課報告書 641 号
- ・ 『横浜軍事裁判関係資料』外務省外交史料館所蔵
- ・ 『Surviving the Day: An American POW in Japan』Frank J. Grady & Rebecca Dickson / Naval Institute Press / 1997
- ・ 『思い出』神工十七会編／平成 10 年
- ・ 『京浜地区の捕虜収容所・中間報告書』笹本妙子著／アート出版／1999 年
- ・ 『捕虜収容所補給作戦 B-29 部隊最後の作戦』奥住喜重・工藤洋三・福林徹著／2004 年
- ・ ウェブサイト「POW 研究会」<http://homepage3.nifty.com/pow-j/index.htm>
- ・ ウェブサイト「Center for Research Allied POWS Under the Japanese」
<http://www.mansell.com/pow-index.html>
- ・ 『大日本帝国内地俘虜収容所』茶園義男編著／不二出版／1985 年
- ・ 『BC 級戦犯横浜裁判資料』茶園義男編著／不二出版／1986 年